京都大学人文科学研究所共同研究 最終報告書

１．研究課題

東アジア災害人文学の構築

Establishing disaster humanities in East Asia

２．研究代表者氏名

山　泰幸

YAMA, Yoshiyuki

３．研究期間

2021 年 4 月-2024 年 3 月

４．研究目的

現代社会は、気候変動にともなう大規模自然災害、地球規模で進行する環境破壊、いままさに人類の脅威となっている感染症など、続発的に襲来し破壊とそれゆえに再創造の契機をもたらす強大な力、総合防災学者の岡田憲夫が提唱する“PersistentDisruptive Stressors(PDSs) ”に曝されている。

地理的に隣接し、歴史的に深い影響関係にある東アジアは、気候条件において共通の基盤を有し、自然災害にも共通する特徴があり、人的・経済的な緊密な関係性は、今般の感染症の流行とその対応にも現れている。少子高齢化や過疎問題など共通する社会的課題も多く、これらを東アジアに共通する“PDSs”として包括的に捉えることが可能である。

本研究の目的は、「災害」を広く“PDSs”と捉えて、東アジアにおいて積み重ねられてきた災害対応の歴史を総合的に検討し、災害をめぐって歴史的に形成されてきた思想や文化、社会関係などを、“Sustainability の実践知”と見なして、東アジアに共通する特徴と地域ごとの展開の諸相の解明を通じて、「東アジア災害人文学」の輪郭を描き、方向性を示すことにある。

Modern society is being adversely affected by serial invasions, such as large-scale natural disasters triggered by climate change, environmental destruction on a global scale, and infectious disease outbreaks that threaten humankind. Thus, we are exposed to “Persistent Disruptive Stressors ”(PDSs), which constitute a powerful force that drives re-creation, as advocated by Norio Okada, a comprehensive disaster management scholar.

East Asian countries are geographically contiguous , have close historical ties, and share similar climatic conditions, resulting in a similarity among natural disaster characteristics. This human-economic relationship is also evident in the current pandemic and responses thereto. Moreover, since East Asian nations have a number of social issues in common, such

as low birth rates, aging of societies, and population decline, it is possible to comprehensively understand these East Asian characteristics as common PDSs.

The purpose of this study is to 1) broadly identify "disasters" as PDSs and comprehensively review the history of disaster response in East Asia; 2) investigate common characteristics of East Asia and different regional aspects by considering historically formed thinking, cultures, and social relations in respect of disasters as "practical knowledge on sustainability"; and 3) outline and propose a direction for establishment of "East Asian disaster humanities."

５．研究成果の概要

３年間の研究期間を通じて、年５回、合計 15 回の研究会を開催した。定例の研究会では、原則として各回２名の研究報告と、それにもとづく討論を実施してきた。その成果を大きく分類するならば、①東アジアの災害記録や災害遺跡に対する歴史学的・考古学的アプローチ、②災害と風土をめぐる言葉と思想についてのアプローチ、③地域社会との対話をめぐる実践的アプローチ、④防災科学と人文学とをつなぐアプローチ、に集約できる。それらの成果は、毎年９月に開催される IDRiM 国際総合防災学会でのセッションとして英語で海外に発信し、またソウル大学日本研究所での国際シンポジウム「ポスト災害―復興時代、東アジア災害人文学の可能性」（2022 年３月）や北京外国語大学での国際フォーラム「2022 中日韓区域合作与発展論壇」（2022 年５月）において東アジア世界へ発信してきた。最終年度には人文研アカデミー2023 シンポジウム「気候変動・災害多発時代に向き合う人文学―東アジア災害人文学の挑戦」を開催し、研究成果を一般向けに報告する取り組みも実施した。

６．共同研究会に関連した主な公表実績

【公開シンポジウム】

人文研アカデミー2023 シンポジウム「気候変動・災害多発時代に向き合う人文学―東アジア災害人文学の挑戦」（2024.02.17）

【国際シンポジウム】

国際シンポジウム「ポスト災害―復興時代、東アジア災害人文学の可能性」（於ソウル大学日本研究所、2022.03.17-18），国際フォーラム「2022 中日韓区域合作与発展論壇」のセッション「中日韓災害防治与安全保障国際合作」（2022.05.27 on Zoom）.

【学会セッション】

国際総合防災学会 IDRiM 2021 Special Session 8 (2021.09.23 on Zoom), IDRiM 2022 Special session 13 (2022.09.22 on Zoom), IDRiM 2023 Special session 1 (2023.09.28 at IIT Roorkee, India).

７．研究成果公表計画および今後の展開等

これまで定例の研究会やシンポジウムにおいて発表した内容を論文集にまとめ、2024 年

度末に山泰幸・向井佑介編『東アジア災害人文学への招待―気候変動・災害多発時代に向き合う人文学（仮)』を刊行する予定である。
また、東アジア災害人文学にかかわる共同研究は、京都大学防災研究所などの協力のもと、2024 年度以降も場所と構成を変えながら継続していきたいと考えている。